

今月のみことば 2026年1月

イエスは…会堂に入られた。そこに片手の萎えた人がいた。人々は、イエスがこの人を安息日に治すかどうか、じっと見ていた。イエスを訴えるためであった。…イエスは…その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。彼が手を伸ばすと、手は元どおりになった。

(マルコの福音書 3章1-5節 抜粋)

大切にされる喜び

新年明けましておめでとうございます。2026年はどんな年になるでしょうか。さて、今回は、イエスに治してもらった人について、一緒に考えたいと思います。

その人は、会堂の片隅にいました。片手が萎え、思うように動きません。その人が自分の境遇を嘆き怒っていたのか、または、できないことはあっても前を向いて堂々と生きていたのかは、わかりません。しかし、不自由であったことは確かです。

当時、イエスは多くの人の病気や不自由を治していました。このようなイエスを憎む人々もいました。彼らは、イエスを訴え、おとしめる機会をうかがっていました。イエスとその人のやり取りをじっと見ていた彼らの関心は、その人が治るかどうかではなく、安息日にイエスが「治療」を行うかどうかにあります。当時の伝統として、安息日に働くことは禁じられていたため、ひとを癒す「治療」であっても、非難の口実にできてしまうのです。いふならば、その人は、一人の人間としてではなく、イエスの行動の是非を判定するための材料として見られていました。緊張感ただよう中、イエスは、その人を会堂の真ん中に立たせました。

イエスは、その人に向かって言われました。「手を伸ばしなさい」。これはその人にとって、できるかどうか分からない、いや、とうてい無理だろう、という行為でした。しかし、その人は、イエスの言葉に応じて手を伸ばそうと力を込めました。するとどうでしょう。長年、悲しくだらりとぶら下がっていた手が、動くではありませんか！萎えていた手は元どおりになりました。力が戻り、指が動く。それは確かな現実でした。



このとき、その人はどう思ったのでしょうか。長く不自由を抱えてきた手が治ったことへの喜びのみならず、自分が論争のための手段ではなく、神に大切にされる一人の人間として扱われたことへの喜びがあったのではないのでしょうか。

神は私たち一人ひとりを愛してくださいます。私たちは神の目から見て罪人だ、と聖書は語りますが、それでもなお、愛してくださっています。世間からどんな評価を受けようとも、神は私たちを大切な存在として扱ってください。それがゆえに、約2千年前にイエスは十字架にかかって死に、私たちに罪の赦しと、神との和解の道を開いてくださいました。イエスに治してもらった人と同じく、私たちも、イエスから招かれているのです。

新しい年が皆様にとって、イエスの招きに応じ、神の恵みの中でいきいきと生きることのできる年となりますよう、心から願っています。(Y)